823
.M8K5

湖月抄

よこ笛

42

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

7152

横笛 細 巻ノ名以奇号之ヲ さき 河 よこふえのしらへはことに
かはらぬをむなしくなりしねこそつきせね
孟 以ニ奇弱ヲ為ニ巻ノ名ト さき 同前 細 柏木ハ笛をつたへあり 箋 横笛
ハ当巻の詞なり。思ひしくかき様を笛にそふ 簫笙篳篥 細 源
四十九歳二月までのことなり。柏木の巻ハ四十八歳の秋まで
の年也。此巻ハ薫二歳 匂宮三歳也とあり 號

故権ノ大納言 細 柏木逝去半年の後よみはじめたり 箋 大中納言より退して権大納言が正官を除のち是ハ権正差別なく
大かたにつけて 細 源ハ大かたの人とても人おしく思はるゝをましてかの御事ハ一入の事になげき給ふ
あはれハおほくおり〳〵に法 箋 女三
御はて ありの事一つてに誦経をそへて御法事どものやうにて
のよあとそこ六ハ求ニ大義著ニ不壇ニ小職
心のうちにもさきこそのおもひをとらん 細 薫の
あく 河 薫のうへに猶

故権大納言のはかなくうせ給ひにしかな
しさをあかずくちをしき物にこひしのび
給ふ人おほかり。六条院にもおほかたにつけて
だに世にめやすき人のなくなるをば惜し
み給ふ御心にましてこれは朝夕にしたしくま 柏木ハ之
いりなれつゝ人よりも御心とゞめおぼし
たりしかばいかにぞやとおぼし出る事は 細 女三の御事也 師 柏木の事也と
当世ニテ文清也 ありながらあはれはおほくおり〳〵
につけてしのび給ふ。御はてにも誦経など 細 今年二月一周忌也
とりわきせさせ給ふ。よろづもしらず 細 薫二歳也
がほにいはけなき御ありさまを見給ふにも
さすがにいみじくあはれなれば御心のうち

木の追善と聞ゆせらるゝ李部王記ニ天慶十年三月十九日の御八講の結願ニ修
諷誦ヲ沙金百両納瑠璃壺ニ施入のよしあり略記之
心もしらで
細 父みかどハ蓮八宮の事なり
るゝ義なりも細説のねらいなる
て孟殺仕え女三のみやを
ちゝそで源の志を嫉むと

細 みかどハ給仕
申しうくと
太后うへとハ藤架の系乃
母うへ之孟殺仕も柏の母
上とも之 義同
義 うさ給
やまひみも 柏木の見舞きき
ろそ父母のなげきをぞ
うかく

ちゝみかどきこしめしてこゝろ百あまりをなんべ
ちかきをさせ給ひつゝみかどにもこゝろよせきこえて
ぞうしこまりまうさびひゞきさとのおとゞの
ありもこゝもおほくのふくりけりて
念じよいとすゝ給ひの一条の宮をもとのや
どの御心ざしふかくいひしひゞきし給ふく
うしの宮にまうさかゝるとも申さまうされんの給
どいとうくはとひゞきしぶりきこしめし
もよろこびひゞき給ひさせ給ひみちを世の見
えとかくいのいかうまひゆうへのさゆう
よいうじうあうしきうのとかゞりこゝろ

ことつきさまに山寺こりどハ二のみやもり
くひとふしきれするやうなくおぼすみ
かのう入道の宮も此世の人めうしきう
けるされあひぬれバさ侮ぐよあり
おさるれどもべきこの世をかりけるやま
じとおぼひ給ひけるすひの宿上も、かれ
じうらみこそハつゝめまつりつゝめきれど
かりしやるさくりうさ侮まうすうかなく
後いもうろきしまつけらもさしまぞ
すくゆる寺のうしそしらうきえやし
よめきいでてうくぬうかぞのうきうの
山よりまうろうなどの山里よつけそ

(headnotes: 細 朱雀の御心よ二宮ハ家ほいなと / 細 女三の宮之 / 抄 朱雀の後世のつとめ事をと聞えきこく / 朱雀の御ひの給ふも之 / 細 女三之 / も尼ヨめさへて / 朱雀の / 女三の出家のくらゐ之 / 哢 表の末とりも筆八年し)

ろやしにかさあうろきう
うる
管ヲ盤ハン根ユヱ
朗詠
洒 遊葡萄ハウ井ン抽タスキ鳴鳳ヲ
線ゲニ點テンスル竜ツハ文ヲ
詞花 冷泉院へとう
うきそてまつせきおとと
てしきせのふ花山院
世のすにあうひもあさ行

のよハわかれん年をまちてはかなく 河 後拾遺 哀のまにまにかなくみれどもあかぬ世をはなれゆかせむ
山にかくれ住てこそあれ 河 後撰 おりしもあれ世の中のおもひのほどをいかにせん
人の心あつまりハ 義 女三宮 女君をおりしゆく時に
く今ハ世をすつるなれとするべし

細 女三の宮へ
をそくとも入なん山路
かねてハあるべしとも山路なる
どしあるべし先後の世の
女三菩提のたよりとなれ
おそくとも此方も入なんと也
世菩提く 師 世をすつれハ
文子の法中のうちにありと
もとハ女三の山路よりされ
みなもと 哢 朱雀院入道
ハ云道文子のみち香刹く
おもし所に極楽のうちに 孟同
ひとくこゝろ 河 池尾本
顔経日父子至親 岐路各別
世をわかれ

ハあはれなれバたてまつれ給ふとて御
ふミこまやかなるはしに（細 消文の端書の詞也）春の野山霞もたど〳〵
しけれど心ざしふかくほり出させて（孟 野老ところのこと也）
侍るしるしばかりになん
（朱雀）世をわかれ入なん道ハおくるとも一所
を君もたづねよ。いとかたきわざになんある
ときこえ給へるを（女三の）涙ぐみて見給ほどに
（源）おとゞの君わたり給へり。れいならず御
まへちかきらいしどもを、なぞあやしと
（源の）御らんずるに（朱雀の）院の御ふみなりけり。見給

細 紙経相逢 無背代受 イ 細 河海ニ地蔵本願経をひけり いつれも仏の難解
の心いさめおかれ給へ 義 是を今の心に以てのべられ侍し
らん 細 筆ておもしろくしかじかいへ 河海ニ云 しより 河 罍子（ライシ）文 櫑子（ライシ） 和名 さかつきのすぐれたる
上六ありたけのかさをあふのけたるやうなる物なり さけをさゝぐる所にかく 細 肉八
朱塗外八黒漆螺鈿 花へ菓子などいれてつかふ物也 内花蘂子 彼 細 之

われさへをろかなう 細 源氏
また女三へ御心をかけ給ふと朱雀
の御女三を仰せありて
おしと同所の仏のちかひを
むさぼるらん

へバいとあはれなり。けふかあすかの心ち
（とかく八誦也）するを対面のこゝろにかなはぬことなど
（細 院の御文のおもて春の山庭もまかくしかれ）こまやかにかゝせ給へり。この（源ハ 彼朱雀の御文のこと）おなじところの
御ともなひを、ことにをかしきふしもなき
（義 おの字ひじりことばにてもなくて）ひじりことばなれど、げにさぞおぼすらん
かし、われさへをろかなるさまに見
えたてまつりて、いとゞうしろめたき御思ひ
（そう 女三の事也）のそふべかめるを、いといとおしとおぼ
そつゝましげにかきたまひては

浮世にハ　細 世中にあらぬ
あらそこらの道がり
まくらからうくさん
箋 菩薩のおこなひの山
隠へといひへとあり盃これ
世にあらそこらそらかに
世の中にあらぬ所がありし
ときとく
しろめさびげなる
弄 わらく
からうしき法様にそこぞ山ぢ
に入るべき事がしるめ
さきさしらく
休あらぬ所とある絵ハか
細 六条院をさされ絵ハ
んまとうらしとあらく

あはれびのあや一かくるまふかきりへの人へ　花入唐文の御文
去後しるかりあらくと源の御後へといふ　まさなかりしの御本丁のそでとらうろの
ゆかしさとりてえもいはんかたなき御手はいときよ
からげなく
芸 うき世にはあらぬ所のゆかしくてそ
むく山路に思ひこそいれらもとなく
おほれなりしさかりよ。このあらぬ所も
ゆめ。ついしかくてこころうしとのたま
盃 女三の源への御あいさつの御心
今はた心とまるさへ海ならぬことなど。いと
つくしらうらげなれとひさいかくや
らうたきのおかしさなどものやうかと　盃 ひけ見の心
えまでいかうらうしきさとさとまり給　源の心

きう いはかりみかしるそ
盃 見給けどもよくあるにとての
のるく源の女三の御新
とえてほ梅るるべし
つくえぬべく
評 女三宮の尾よむり給し
うらも源氏のぞしくる
ひあてく
あるいとらいよあり
細 家の御方よりハ尾り
如絵ひらく枝へ一向よ画
じそ果絵つり源の方よ
つまハうけそるれてへこひ
給へざうるり

かまつけてハおしくうハぬめりしとそし
つきえぬべくかがかるれだ御本てづら
満てしまさいとこころうけとをく。う
うしとかあらぬ絵よりてるとこ
でぞおつかろ。花ハめれとの給よね　細 源の御袖
まへつきつ。ゆきそてそひ出まひく御袖
ひきまくられそ給さ海いとうくく
ちろさころそりのよ。うしのこりん乃紅梅の　細 唐小紋へ　箋 うらおやの紋え
れぞのすそ。いとうくえとけあきまひき　箋 文紗うずの花え　箋 ことえ
やられてく。御身もいとあらくハそてうしろ　ておきおのおかりうえ　行え
の浪まとさにしまつるさ海ハ。れいのとうなれ
どいうらしくけまえうくそひやうらの桜　箋 まけ

仰まろくしきれとても
みなりてつまとしうらんやうあうりし
緑衫とえ也　然也
らぬ事多まして。ごしさしらよいろしらり
うしんらうて。らちつきらうしうまれ
細 柔輭の猫也
ひゆくのひしうよよろうしうらりうしんくら
細 源の心は柏木よ猫をとおもひ給ふ也　細 柏木也
あまいおうかいとしくとひ出うれどうれ
葉ハ伊勢にそてゑうにありまたく　孟 女三ノ宮也
んいとみゆうよさはなうれうさのしうは
すうらしりの紙いぞてうらんやふもよ
なすれ今まうけうくりのくしう。さ
孟 源氏也
海しとるとまくるとしきるどろ消れう
まふとく
かとのうけよと。うけるうくるまされさ
葉の心也
まふりよおのをなましあやうしおうし。
これからうるはしうよ。侍ともをしく

抄 業のくらちくもとも也
卓まりて。いしおてゝしうとりちらく
孟 源氏也
してらひるあぐりるどしあへで。おゐら
さうなきとく
うらうしや。いとらびんあり。れらりくを
くひきのよ光てゝめあふとりのえひさら
おもさ女房もとそいひるをしてまうひ
抄 源の業とい之
まふりきいでてさあひく。との衣のまとのひ
抄 何とやうんとうう殿方のおうと也　源の詞也
と気色おりれ。ちいされ御とのちて紙
おもくとる。ハ事や。おんうくらの程ハ
うしいそけふきさ地と。のとこへしと。今くら
いとけそひしとエうこそそづいしく。られ。
抄 柏木に似とらく
女房なりのくしまうめうおくううよ。うらうん。れ
ねとうんすとふうそのまで
ひおくうらくかくぐしさして。非さうこめよ

くりのよめとくめ
仰されなまり。おがろら
おさうさん人なとあら
しらるまそあへし

女房の一説　細 明也
の中よ女就佐殿の女さら
く。此業は男とよむべき
しらり　晩 明石女佐の
佐殿の女うしらの詞なるえ
よそふれるよし

ことこまかなりし。気色そよしあるのくれ給ひぬ
まめやかに、いともこともなくすゝみやかに。花の
盛にあはせてあそびたまふべくのみ給
からぞゆくさきのことをのみいひいで
あはれなるをみおもひ出らるゝにいとあはれにも
うらめしからむとおもひつゝ御くも
うらやましくおもひしりてかへらむ
女このまれとて
いかゞすべきをわすれぬるをおもふに
はかなくさりのふるまひありけるこそ
あはれにてのかきひらくれどあはれにも
てらまともかひなくさていとなつかし

とひがほなるさま。月日のたちてかは
のこりてゆくすゑもそでぬらしてまふ
ひとさまこそいとよのつねならぬ
めでたくなれはてたるを、このきみ
まづきこえさせたまふもかくて
さあるよしもおぼしめすやうに
かたらひてすこしいかなるべきとも
ぬらしけるのならひなどのおとこ
しかつり、あまたつゞくまゝにかなしひ
こやくしていかゞおもひしらせ
よのならひもかくよありぬべきをか
てあしきこともいかなるべく

ほの心えて思ひよらるゝ
孟 夕の心は女三と柏木
との事ハかのよしと
しおぼえたがりハを
しるべし

てこまうしく見やすまつけくるしう見えけり（細 柏木ノ母）
つゝゆかしうぞくちおしうなりけり。大将の（三宮の御事之）（夕霧之）
きみはかのいまはのとぢめにとゞめし一（細 柏木の遺言を源へ申あきらめさせよと）
ことを心ひとつに思ひ出つゝ。いかなりし
ことぞとはいと聞えまほしう。御気色（源の之）
もゆかしきをほの心えて思ひよらるゝこと
もあれバ中〳〵うち出てきこえんもかたは
らいたくて。いかならんついでに。この事の
くはしきありさまもあきらめ。又かの人の思（孟 柏木の思ひ入やうを）
ひ入たりしさまをもきこしめさせんと（源へ申さんと夕霧の心之）
思ひわたり給ふ。秋の夕のものあはれなるに一条（細 秋ゆふべ。けいきの詞之）
の宮を思ひやりきこえ給ひてわたり給へり。（落葉之）（夕霧のこゝろ）

すだき 河 多集スダキ 万葉 潛円上
孟 すだきハあつまる之。夕
霧たちなどの君だちなるべし

うちとけしめやかに御琴どもなどひき（落葉宮之）（細 楽器をいふなるべし）
給ふほどなるべし。ふかくもえとりやらで
やがてそのみなみのひさしにいれたてまつ
りたまへり。はしつかたなりける人の奥へ入（おひしかたの人の奥へ入給ふなるべし）
つるけはひどもしるくきぬのおとなひも
おほかたのにほひかうばしく心にくき
ほどなり。例のみやす所對面し（孟 母北の方の夕霧と物かたり之）
給ひてむかしの物語どもきこえかはし給ふ。
わが御とのゝあけくれ人しげく物さわが（細 夕霧の三条の家の事也）
しくおさなき君たちなどすだきあわて
給ふにならひ給ひていと静（しづか）にもの
あはれなり。うちあれたる心ちすれどあて

虫のねしげき
細 虫の声しげく一むらすゝき
柏木の亭なれども一条の宮をさ
しけるにや あはれ此宮に上村
薄もよりのしげるよひ
かたりて虫の声そへん
秋のひ暮かたとあは
れ今でこそあるべきか
やうなるあたり
細 夕霧の心也 宮方の御住
ゐ所などいへり 盃 此やう
なる所にて好色の人の心
ありぬべし

故君のつねに
柏木卒去ありてのち
ことひかずなりし

細 此巻ハ

くすしかりけり。前栽（せんざい）の花どもむしの
ねしげき野べとみだれたるゆふばえを見わたし
給ふ。和琴（わごん）をひきよせ給へれば。律（りち）にしら
べられて 律ハ女のしらべなり 細 秋の調也
よういとよくひきならしたる。 弾
人がにしみてなつかしうおぼゆ。かやうなる
あたりに思ひのまゝなるすき心ある
人ハしづむることなくてさまあしきけ
はひをもあらはしさるまじき名をもたつ
るぞかしなどおもひつゞけつゝかきなら
し給ふ。故君のつねにひき給ひしことなり
けり。をかしき手ひとつなどすこしひ 盃 夕霧也
きたまひて。あはれいとめづらかなるねに 盃 柏木の事

ゆるしきこえ
細 女二宮の詞
琴の音よりて柏木の名残
はこもり侍らんかし
盃 柏木の琴をとりよせて
かきならし給ふ女二の宮をさ
夕霧の御息所への詞也
ことのをたえにし
細 御息所の詞 柏木卿をさ
していふ。かくれて後は琴の
わざもし給はずいとゞひか
ぬさまにもなりたまへりと
く 河海 伯牙が事あり
院の御前にて女宮たち
朱雀院も女宮達
の御琴 女二の宮の御琴を
さだめ給ひし御息所の詞
さまに
世のうきつまに
のぼ 浅茅生
細 のうきつまにといふ也
のぼるなどいふ事
ひとへ 柏木のなさけ

かきならし給ひしハや。この御ことにもこもり 盃 着也
てはべらんかし。うけ給はりあらはしてしが
なとのたまへバ。ことのをたえにし後より昔 小息所詞
の御わらハあそびの名残をだにおもひ出 女二宮の
給はずなんなりにて侍るめる。院のお前にて女宮た
ちのとりどりの御ことゞもこゝろみきこえ
給ひしにもかやうのかたはおぼめかしから
ずものし給ふとなんさだめきこえ給ふめりし
を。あらぬさまにほれぼれしくなりて。ながめ 女二宮の御事也
すぐし給ふめれバ。世のうきつまにといふや
うになん見給ふると聞ゆれバ。いとことわ 細 夕霧の詞
りのおもひなりや。かぎりだにあるとうち

りのかしらのつかへ御息所の御心をそしりけるてのゝしり
まぎらはしみやる　細　源氏ともなふさ物もひとへ柏木をとふらひて下には女二の宮をとふ
らはる也しそのさまありし世を思ひしるをたにとて思ふかくあげゝぶくまし
しきまつはるなりや
哢　以蘂傳謂夕
霧柏木と和琴のことを
めでゝ後聖にありける音
ならぬ者にかゝるぬこ也
とやつる人もなく
みとぶるよわくらめ
河　琵琶引は姫秘仙楽
耳聾晴明
ちゞへにかゝり　細　夕霧の句
まきの御中ならねばなま
うしても女の御ことの
音よくつくらえたれとこ
御前の音のよりつかひ
ころやもは宮ハ安子くに
とうにし也八女宮の御方に
まいれるかたなし中のを
はま帰の中のへらんと
もし

ところあるかくしこにはあとしやらうまされたぞ
御息所の詞也
れなきさらしゐし思ひよりまかしくりや
細　河息所夕霧ニひきた多とてすゝめまうく也
こゝろくもしくぶりおふるゝをさきにあれへばりのむら
しらせふまへし行めりくきとふるにあさ
夕の詞
らめ侍らんとさらし給ひき思ふ月にかさら
なるのとハこしよそて給ひしめそれきとしそ
花　さてそのまゝ
うけ給らんと申してつれなくてくすの
にとしせらハ女よりひさうせなりしせ之と也と
判そく女二宮の引給
きくちくのしもをまへどとらみしもう
細　周なとあり
けひきこもまゐりのこしするれへ思ひおそ
他　細　夕霧此句
ともらて給りすかくくり

さゝのしとゝ　細　和琴を
八引給つゝおもしろき威よ
へきでて箏とひきす之

御ひとしびれある
おこうとりあ女二宮の御心
中を推量し給はゞ八
給ふ義ちとおとるふ
よつくさせし

河　琵琶はおほらぢゐるる
細　鴈不乱行
色よりもおほらひて虜がゞよもつとどとし
蓑　落葉の宮をいひやる夕霧の詞也
かれねこゑしがくゝすゞくわらんしの風の
もうさむしくりのあられあるよさそかれ
落葉の一五花あるよ御息所の引まふらくなり
てきよのくじかひかれのまゆうきおう
夕霧の言
まつと行くふくきって思ふかるよてくさう
ろとまりもそくおうくふきもあふすれ也
細　夕霧の琵琶を引まて
まこで琵琶とらふきそていとうらしき
河　平調之
細　夕霧卑下の詞也
ねよ物事思とひさまあはりしとよびかし
哢　柳木の事をいひて卑下
かれはことらいいきれとられへしきゑ
思ふよそへまてとて
とまふゝやもそとちよすのうら花
とり琴をそへて書思ふとさ
そのしらそしまへどもりしてつとに
細　落葉　我心の　和琴
さらしつゝへかれはあつめてものゝおく

細 夕霧の言

出しかりつゞけつゝよ

夕霧
ことに出ていはぬをいふにまさるとは

人にはぢたるけしきをぞみるときこゆれば

細 楽の末つかたを義 和琴を引給ふ
落葉の心
たゞすゑつかたをいさゝかひき給

落葉
ふかき夜のあはればかりはきゝわけど

女二宮の引事を夕霧
ことより外にえやはいひける。あかずをか

和琴とをいふ
しき程よ。さるおほどかなるものゝね

哀なる事の心
がらに、ふるき人の心しめてひきつた

へける、おなじしらべのものといへど哀に

細 夕霧の心
心すごきものゝかたはしをかきならし

てやみ給ひぬれば、うらめしきまでおぼ

夕霧の詞
ゆれど、すき〴〵しさを、さま〴〵にひ

細 柏木のこと
出ても御らんぜられぬるかな。秋の夜ふか

しはべらんも、むかしのとがめやとはゞかり

てなん、まかでぬべかめる。又ことさらに

まいりてさぶらはんを、この御ことゞも

女二宮の
のしらべかへずまたせ給はんや。ひき

たがふることも侍りぬべき世なれば、うしろ

夕霧の色恋と琴
めたくこそなど、まほにはあらねど、うち

にほはしおきて出給ふ。こよひの御す

御息所の詞
きには人ゆるしきこえつべくなんありける。

そこはかとなきいにしへがたりにのみ

まぎらはさせ給ひて、玉のをにせん心ち

御息所の夕霧
もし侍らぬ、のこりおほくなんとて、御おく

つべくるんとく　咲と秋
の面白さにハ夕霧ハて
りしふくの抱乃ねとし
んゆうらんきと吉へ添り
よまうらりてうらとげ
てる夕霧のりかろねぞ
みのとよせん須もうさ
とく此時ハ意よあらぞ
是命のうづら須もあそえ
さあとく　盃桜同義
是もまみん　細　扇の自分の於
おる夕霧の句よ此扇とえん
もこうりて給らんうしと
色と須どうけうらお筆
のまよ此笛の由来湯淺
うらう作りうら由ありそ
れを女房のうすしくの
まうんも似あるあやうられ
べくよこめその名り花名
よ文選蘭藤ノ吹笛作思
旧賦ニことあらずよ及づぶ紀
由されよささとりん　細　ささき
の声りよあくそひて笛の声
のせんとさう成りくさしく

盃此笛と由車のくらうそあそべつくん為の由されふふへうよあくそへべきとこうん
しさとかり
あうりしね
さもめるとく　師　夕霧の此笛のうと酒男とのるへ里
山りしと戀よ　細　和琴と
川しうハゆうられ給べし
此悲の是ハえ須よとそう
為りし柏木のくあり　咲　柏木と
とおづあし
思ふのうりて和琴あて
引しけハゆうられ給べし
此笛とい八へるハいうどこ
家をげさ　細　柏木の宿之
笛と虫にをして誰かある
八雲ふかも家とのせあう
師　夕霧の笛のねよ柏木
のむりしとうんハあしく
し笛の　死ひあしく沁し
ねハ笛の文よふゞなく
ねとそんくうり　咲　柏木の
うくとむあそくうりしとえ
師　笛の調へハうくねど
柏木ハみうせぬハうつね
八重うでしく

よえ　細　別れよ是柏あつよそくうらえ
是抱よ笛とそへて夜れ須。是よるりへまよ　文此自分の句く
しくよみうさくしもつきうるべく哭と
さ作りし人とうろうをとそみようげりうく
をあそれはこあうたはされよさとそんん
しなるんよそあびうしもいぶうしく作りと
さこしあへだふりくうりしね須　夕霧の句　細　柏木の秘密うりし物しえ
そ給べされとてごあふまごれもげくよとく
とりよ男みそへてめそあそびつこう川
うくとさうしよられんねのうぞりハえふさ　細　桜の巻ののきひしうと今出ひ出うく　此笛の名
とさむずぶんひとよいそでつてて
の浪りそえ吹出さむとく
がるとありくさてしごらすひしよ是ひ
出須よ今きうしあらられあありくそひそく

盃此笛　細　夕霧の句さての声よの縁よつさし酒男とその男よあさきさ
盤涉調　盤涉の調
ふくよみききすしんくんしき調のみうく
ぐうりかきさしてむりしなよ志の独ごと
はずまするるえし　しくへうるとし　ひとり　和琴に
けふそもつてゆりされ給そうこれそま
はゆくらんとて出須よ
柏木　家をげさびぐしのやぶよみふしへ乃
秋よりつしね虫の志りれどくるしいぶつし
さみつり
夕霧　しき笛の志くハてよよううしぬとし
すしく沁しねくそつさとハいそでうく踊や
そくしひ給よ。恋もいうく是ようり。底あり　師　三条をうへ之

いりまれど　細 信ふまく。
いりまれしりまさくの岸
やまおくしきくるみきらう
われらやうれまをうられ
やもしきまうりふや
妹与我 咲 只に雲井居
催馬呂
の南へ帰られバ妹と我と
いかどうまふや
こよひの月をとらぬ里と
細 こよひうね独く人と
去べきと人しひて優
あくまふべし
うら秋の月ま　細 くまり

往てかくまかんのゆきり
ほうくもろかしとおりふ
夜をいそぐよ往てわ
ぎまでん人まへてむ 紀今古

くらきつれど。かうしおろさせてこれ（お 夕暮の露ふかくをしへて雲井居人への若ちえ）
ねまひよるりこの女よはけゆのしまそく
ねんごろかりをくてまめきる人のこゝへ
あくせくれバやりよ夜あかし給ふとる一（雲井のこと）
めぐりて入まへども。さくくねさるやうよ（夕暮のこと）（細 雲井の居こし）
てよのくすふるべし。いりし我とつかさの山の
と我ハいとゆうしくてひとりごちぬらひて。
これるぞうくさしうあかあむじりれや。（孟 夕暮の雲井へしそのこれやよのゝむせ）（あら理れなるやまし）
今夜の月をとらぬ里もあかりくるめき
往くしかげさとまかてことすまれあげる（細 名残のこと）
どくまでちらくかしまくうくる夜乃（夕暮…の）
月よらくるやもしくゆめきろ人へもありやのとて（細 月のり）

うらうでめへおろうろうるゆどゆゆのしあへ
心やまいうま井さひてよるもひのふたわち（孟 居の心…）（細 夕暮方）
のいそげるるねゝどひまかりひみどゝこ
とろうもよろしくて夕房もうかここてふ
しきくらうひろげもみそぎけしむさまおろつる
とろゝの今を夜をひきてするよ物かくうへ
ゆまうりこの語をうちふさきひつゝいきま
ゆゑをすおめゝまうてんれとぶもはゝう
べつちくずあるびまかんしくえもとびこう
も和琴のゝよまかうしるどもひやんてよ
しまつりいりきれど。敵このまくぐ思わりさの
うらぞく人ハ風んべくるくりておしゝそて

なら淋中の　暁　雲井居
ゝ夕霧よの中く
うらくしさびしき名ひ
やりもなくて
わざんのくしさにえて
てきらうしさなひや
まもなくてむつびそめ
しとく
てうらとしらてとで
まと　暁　夕霧の定心みそ
ひろう女の手八又別の
んなきにようて雲井居
のとうりえんぜうくして
とりつて

あがしいてしみつきさくしきなりけれんとぞ　細 なくて
孟 さそていらしとこわまなやうもやさし
出てよつけてもいとひふうしうなげる。こそ
いくとふひうつく
どうちんしとこそいやとおしうへまれ。
細 世うろ所うかむ物と
あくさの世よつけくもうぞうりるく〳〵と
暁 くきうなく中でてえとうのよる手げるもわりくく
いうつしんさぞであうしみぢそうよ。なうれ
中のうちうしきばくくうさひやうりなく
てむつひそめる年月の猪をうぞふる
よおもれよいとうくとしふうらてどうり
細 夕霧の者く
なきしひまつるこころよ笑くあのひなり。
伯来也
そうし猪入まつる夢よ。の出ゝく〳〵あり
しき海のくらつきすずきうてゞうさいつくくつ
細 夕霧の夢くらく
みてこのみえとらりてさう。夢のくしらみは

つえしけり
細 暮中物其の奇なり。
いまうくべの如風よつさける
物あうべ八音とふ方人休人公
ふく所　竹の添よ吹よ
が風とふいまありごとあう
いとハ竹よ風の吹く所うど
よくらうし八重のうくへた
なへしくく 帯 末のよなず
きハ意のうえつてんと
なきく
つぶく　細 乳あしわまシノ
もとく　嗚呼ツタク　嗚　廣韻嗚 小児嘔ウ
乳又不 顴而吐ス
ふしうとしうらして　孟 居
の縈を耳よそへさえさ
あくし甲裳くしきさ衽く
あまみくきうしうる人を
暁 うしとさきへいやしき
衽くとく

お 年の心とあらへく若人
なるき人のもとうつりつ。このこゝろをよぢは
て、くるりとおふるよ
孟 柿本画具あく
猫竹よわきよる風のぐしきすゝへまろ
柏の句 細 花香女三の宮すゝろ
よなうさきわよつるくへなへとふうさしくふ
いう義それを涙ありさしくあさしく夕霧の義心よを傳へん方なく
竹りさしいふ絃よもんとそふ猪よ。おそれ
細 夕霧の次よく
のうをよびれくくずすきみゆふ此声よさめまひぬ。
あ悲く
このえいつくなすきのそ。つくくあどうし猪
お 雲居居とし
へぞ。めのとよゆきさはぞさくらへつを瑞雨とに
なふらくとうくよせさせのひくくゝ
あ悲を乾角あつひ手あるし
くくそえそくらうつくうひくくいゞれ
ねイ 細 雲井居く
てみさまうりいとうくしえて。つふくと
おつしげるむねをおけてちるあどくめ

らうらうし
箋 数寄くゝ細わかる也。
太平 含みてもあるる也
孟 ゐとさうひ子のみびやか
時 数寄をよし也
いやしき所ありさまの
義 今日のさまにひくう
こゝろすし思ふ也

給ふ。ことにいとらうらうしうおかしげなるを
きはゞろく（お）あらしげなるよれちをいとう
細 乳のいそぎふるまひ 哢同 孟 源まして乳いまけ也とも色めまよろつめれより
くらしるりとゞをやりてかすがらにめ給。
夕顔く
とをくにまもりかりてゝいるぞ
あまりのゝふうらまきしらくしあぞし
てうつろうしき。ゆめのあうれもま
ぎれめべしかやかしげよこそこ申れ。
細 雲井房の随之孟 夕顔のいうらうが雲ひしそ
あさくら
いやめうしきれ見給の月じゝよあくれ給
夕顔のゆんかぐれ
あさくとし
あく東ふうき月かぞてまうしもあげ
られさ進ば。れいのりのけのへうるなめり
など。いとりくおりしきらいしてうち
おた夕顔のさかなし
孟 夕のね
まへば。おりくしひそあやしのりのじゆ

あまこの人はゆやうり
きりまふくにゆりひ
いとうしらく
哢 その歌よまりありう
ふ別のわかりするど
哢 しうらゆうにのまふ
こゝろとそてあさうらう
るう 哢むきとしてうろ
新を出はいやうなれば
まゝがゝ細くうくの
まよく

あくべや。まろうしあげどへうちろうて
夕の程しく
げよえいりこゞろまし。おゆきの人はお
やよぬおふゆうよ。ぞひいろりあくりの
をよそのくゆひかうよしれそう
らろやつとまつるもとの。いとたるうげ
細 雲井
されば。ふすがよりのもの色をそいぞく
雲ゐのかりかな之
あひよひきりしとてあをうりそや
為の和く
うびを。さすがよそらずまつるさ色もよ
くうしみす。比 このまへざいなど
發
花木の前よ本以仍らく也そつれあつて
夕顔の義之 伝 類などい百知不
うきむつりあいしのうひ。ふねのくおも。
葛ゆりしぬりよこのかえのつうりく
箋 人の執ふをもわさる物は他人の遊てうきさるのあう之
とおろうれ。人のうゝうどめぞありへ全

のいまはのとぢめに
河 閉眼の時なり 細 臨終
の一念は生々世々をもわすれずと
とあり 臨終一念生處是
定云云

ぞうさまに誦経 細 柏木の
葬を此所にや。傍人の葬
所とあれぞく
みえさせのる 細 後仕大
臣方のちゐるべし。従三
るゝにも惟光。岩裏紫
によりて柏木の別
て御供のあるなるべし

しりのくゆくへきかたにもおもほされん女の御
つみかろむべきをとや。いかでさひつゝんご
のせまそくさとよとおもひいれぬらしも。このい
まはのとぢめに一念のうらめしきに
とりし衆生もおなじまかれてこそ
はかなきよの闇にもまどはるれ
つきぞとそ。いはゞすみをもうしなひぬべ
とおもはれなど。ゆかりしつけてぞ。みづから
に誦経をさせ給ひ。又のちにせのあるにも
させ給ふ。此みえぞおはしましくへのさ
ゆへあるかはりに。こそひき出まうしらしき。
しいてまちらに仏の御ためにはおほしなんもだい。

女法のおもふさまに
法は明石女御のおほんこにおはし
しますによりて夕霧八紫
上の方へおはせしく 哢花

え給ひしこそ 細 三宮大将を
すべてのまゐらり

こゝろうしとおもひて
細 我身にも源氏をうらむ
ゆたかなるよのおほく
三の宮のみこを
細 紫上の御方にまゐりて 哢 夕
霧の源氏をうらみなき
おもしろのおほく
あはれさん 哢 大将乃
うれしと人のまねやうにも
くさんとく 細同

ときこくいひすゞしくあくなるべししと
おもひて。六条院へまゐりて女御の御方
によりしまゐり給ふ。三の宮こだ
うちかくなりにしかば。あしくさすかにそこ
おきまゐりてきこえさせておりしまゐらせ
給ふるにつけても。猶あはれにつきせず。いつこ
さすかにあはれみてはかなくもいとこ
づからしてまかりて。いとゞあはれげに
のさまへひらかしく。おもしろきをいふ
でうちすゑのまへをいとうちうへん。いとゝき
やうくさらしていつゝさまよひてあさ
まくれはくいも。すべてまうかなかりくらくらん。

このさくめ二条の
細 明石の女御乃はらく御
ゆうくのうふくなりうれ共とへ
花宴之
すゝのかけのかほる
死ぬ猶二条をいひき共に
らせらくもとのすれ経
よとんずりすつく

ゆかやけの流をきさ海のり
御 随身大将ん随身也 此
是の猶文字なれバ右の随身
とうこ 細 面白きを海之
細少の供にうりり継数例を
へうさうすみそうり

るつくしそて御袖しそてこうらしてすへまへ（白き扇の御袖よそて夕かほの花とそく）
ば夕かほのこといとう川しうそめてそをうらうぬまへ
さかも二のまへ乃わかむとひとうつまかず
かうく猶ひのふをとう川くしうそへおかん
しゆもくそうりうり。すゝのかけ俤とまよおか
うしなりけるをこうまへうけありひとつ。ゆめの
とろねよいざうれんとのまふを。二の君おがに
ゑねとやくそひさまう。流をかくんじ
ていとこちらけしきれまさ国ともられ。
ゆかやけの流ちうきまりりとわらうしの
随身よつゑやうもんとおしそひまうと
二条ころそいとしうるくおそくすれつくよ

のりくよ 余 二条の流
みきといすめやまふん
もうぐ一五 二条ハ流見
るれりく
流年のうりにうらハ 仰 二条
源氏第つりにありまし
若紫に 源氏四十五
六条坐の俗よまり住由る

わくしきこえての御冠之
細 御座く源夕霧の事を
のまつり 仰 上糊よまつみ
の中の経ゆとのうまの
うるべく似べしゆえまされ
とも礼義も
文とうらのいうまへ 箋 源
此ゆ中く太上天皇の流子為
是バ文字とも別のものハへ
のう有りとも中らしてま
てありまづ物よのふれぞ

このうたよみてたひゆ給ひ。いうめうこうえん
あうひ給ふ猶もとらしひて。二条へとうまう
ここのうたなるよつくさりゆうくしすゝみ流
うろかうくなんかりしきすめてうれとしの
猶まりうしゆかそろてうかてすらしさを給
ゐどさうくしすふくらあうてそていつれたとを
いとうろそくしと志ゆめしきを給ひてくざる
しくうくうくしきいてのお冠すうりおか
さまそえともそまろうり給ひんとおすろまいこや
ようゆうれくさしろまなうすれ給ひごそ文
の前意へこやうちの流つうしみ侍あのはし
さそうしとれうくろのきしいよ物語をとな

こゝろせきあへずきこえ
給ふ。夕霧の和歌
柏の子あつかひを致仕よ
りめでゝ歌ゆかしき罷
なるとしし

（細 致仕の大臣也）
ちくやうじのさばかりかしこまりてもてなしひわ
（河 子 孟 柏の子をいふ也）
まめやかにこの君のうれへるとひとすまる
きこしめしてあはれがりのたまひとゞ
まうどめかしくつゐにあはれもまかり。
（細 夕霧のかく思ひ最桜何よ柏の子のあるらん）
きうせかたくなしくさまれとも
（おもひ）
おもひのこすはかたじけなけれど
（きかぬもあり）
とかくうちしのびもあらしまして
（細 致仕の大臣も）
すりしかばこそひとりいてつゝ
いとゞうしろめたしうしろのはかへぬ
（そよ夕しも喜びよ）
（細 夕霧の源氏御方へ 孟）
まつのやうにまかせてなとおはしまし
そのおほん日まで夢ゆめかの一条大臣
（師 落葉の宮の御方也）
よかりそめのことにしておはしましける

（孟 かくのかくり）
えぬまうけの給へ夕霧のまゝにこれは
むかしのかうらうかんめし
（源の事）
らんあらしあさの御まゝのれいへお
（源の何 さうぶれん）
よいめしへのかへるおもとひかべ
（お 落葉の御方より御息所のこと）
そうおもひぶかく御かたにんはかりなし
（まうと源のおほひとへと）
うりのゆかしきをせかゝけまかせてれれ
（源の御心にもよいものかりて）
じつのおのれとゆりかしきなさけ
（細 夕霧を云ての源の御方）
どもしそゆかれどみ方のところにさし
（柏木への心にそひて思ひいとゞ）
とかくそれおもひすかにうなりて
（女二の宮の事なり）
ちかれぬしすかうあはれすかうなる
（てあれかしにて）
なくてくつうひゆかしげなることゝ
れみかんやさかいなとこのかをめや

あさうふ御心のかたしへの
まいりしへの　孟 御息所の由
まいらせ給のうけたまはり
細 源の語に御よ表あり
べきものかくのことくし
く花見へ夕霧の一条の
そのうち源の御よきよ女二
ま御息所のまつりごと
つけみかしこくとうり
こゝろうちやそれを源
氏の御批かしまみし

はあしうへかきよくて
発柏木の遺言まへし
よの落葉の宮への御らん
へ風源のかたにて御へし
とこし

こゝろへられんとてさうし [illegible]
花ミゝく 孟夕へ源の召れさ
かしふる川ちかうべらうろ
とのまひし [illegible]
暁ミづからしすこまかで
こそおとめさのそうとく
細 夕霧のこゝろ引まし
とうるるすれバかくうるぬ
るまとく

よろうべきこしおうんとすん。なふとのまへ
花さよろし 細夕霧の心中之 源の仕多それハさハるゝまじきこと
へうりし人の心へのれそうしへそうらうろづ
しげみへくうろすきえりぞやとこゝろ
給ふみよのこゝぶれゝ給ふん。なさ給つゑすゝぬ
細 夕霧の治くし
世の義をよくけそめ給ふかしおもりよぶらろ 細 今さえく
まうハ統る人もとらむべきこと 孟 かくりて世の人の [illegible]
うしうく給ふんときっすうくまのつゑ [illegible]
義 嫌疑 [illegible] 孟日
がんぎありがれよ給ふもめとそこしそ [illegible]
かまへんハらとさしすぎそ。こといぞ給ひん
やかくさこしよ給ふしまし。まのつうく
よ源のうまりしそ。かりうくのゝうしつさ
てがうしうかん給ふしずまこゝも人まうり
しうまかうこうじかのよまよこて給ふべかあれ 義 藤 [illegible]

さのくどくびハまへざれへさ
しるそよまうしうゝ
ござ候ふ。とと

ミうしたくまうくまり
花 夕霧の源氏の治おち
給ふうまふうさく一条
給息所のをとうう給ふよ猶
とまうりし級補末の義
まりてさくまるどこゝろと
とうすきとうりやすまこと

なさむゝの多 細
べし。花宴紫上の父とうく 桃園ろう
いうぐ紫上の父ハ式部卿宮

の年数のるかく
ひるどきよ。やうしくいらうわうひのまへこゝ
源じみとも物し給ひぞ。はるさわざれが 細 総角の女房右衛
よううつきしくまじ [illegible]
しく。すゝさくしきのゝしれなどよ物すれ
なとりし給ふぬよふうとけまかやん 藤葉のこと
女二宮の仕る
けさなうしうかやをこさ人への仕る様る
うん物しまひろうなどし紫へ給よいうよ
さつおそつくり出るく。もさうしちうく年り 細 源氏の
うりすんひさくのゆめしうりとこうてくさ
まんでまくよりのさの給ふのぞでころ 源の [illegible]
かゝりてゆかりしおはすりうくぞとおりぬの 孟 源のんまに
猶ハうつよまく人さゆへおうりのるうりうれ 細 源の宮へ
ハ陽成院の仕ゆゑあすり。それを式部卿 桃園と貞保親王

せぶらく、故とんゑまうしことく
師説 南宮式部卿ハ貞保親王八宮の遷者へ清和御子母
殿后陽成院の御母也。それと紫上の父式部アムゑよるぞくへてこうよさるべくこゆへあり
とのまよべしさくめるへ玄ト年の十二月朱雀院の御妻の皆まで現存之其後もいかで
らせ給もぬるや。紫上の脈のさくるすし。然ハ桃園式アムと貞保親王にもまくて云う
ト未物語いでくも出るすまぐし

文のいつはりきものめしあひろとりの車つゞき
くもらくもらいとこゝろをのべしきさ、
でしよんじて、桃文の女枝のゑんもとくあら
目、とらり物よちくゝせめつる也。女のらくん
へゆくもとうじくりもくひしらふのし
さらるつまるゝのあひそ、すゑのせめつき
へ、わうさいつくこふとうはめりひやまずんさ
やうまつひあうりうんうしるてゆかりして
のよもいといくらりかさ人をれへ、ひかり

こうよいしぐくくりて
義 文の菓のりを思
ぬくそして聞すふと
源の此かまそらしきのおう
子様りてこ
いましそこゝのつみぞよ
此りひしそにうやうに
時ハ西館のつみでよ思ひ
知 ふかそくうは此かめりく
りそとおして柏木れ事
ふむあうて

なかくさんかくこし
すりり 孟 柏の源乃源を
ま遠くかうと流しと文
の源へ新しく

こしあらんりしとゆかもとその形影らこい
こうよいとくくりてとこゝみもうら
おきとて絵りしとどあらくこまう世ま
らんのうろあれいいましもことのつる
でよゆりひいぞくしうやうまゆかめし
うりそるすしていまそとそし浮ぐよとく
かくひよ並りて侍しよ、あかしん嫁
こゝもいひ為侍しあうよ、志りくるん
あくうしこまりやうし、ぬえ、て物し侍
しかいつるうくよく侍りくん、いまよそ
のゆへをあん、ええりひまへよりけしよ、ハ
ゆかつりすく侍と、いとくゆかしく思げよ

ちゝしたみかさしくそて
孟 こゝろかうも柳条の句
りとかかんするハ思ひしぬ
いろ源の志うしこそて之

一 ゆふれつゝ
河源真人公 夜夢不須説 事
女の云ふことハ夢など信する
見女子やうの此の不肖之

一 あけるるとそ
細 とぞとは倒の詞
ちの筆法あり

まうらしきつよ。されはいとゝ、ゆかしくしゞ。あまよ（細 源の心之されハよ夕顔ハ和歌ひくうらみく）
りハそのやどりこしおもかげのみ、つきこ
すゝねハ悲しくかなしくて悲しくへのう（細 源の様 孟 さや）（うち人のうへこそゑんかきりなし 源の心之）（源の心得之）
らことを思ひかゝりの気色ハ夜のつゆぞ
よろりおもんと、こゝろもえ思ひ出じこ（孟 源之）
なんさて、つまおもかげまゝの夢いふへあはせ（夕顔のうらみまさるくゐく）（ものうくハなうる之）
てかん出てべきにねうるしなしくり、女房（たうく）
のつみよりかしこまりのさまひてしかれ
さくれいへと、るすけまじらいて（孟 夕顔の心之ふやうに）（夕顔の源の魂気よ合ぬうと夕の心ゆく）
まことてかゝといのまたおもてまうこつ
まことおもひしけるとぞ